

響き合い生かし合う社会活動をする人を紹介する

# シャカカツの人

Vol.  
2



子育て中のお母さんが  
ふらりと気軽に行ける場を

「インタビュー」At・K Yoto 代表 武田みどり氏



しゃか  
かつの

At-Kyoto  
代表 武田 みどり氏  
インタビュー



4人の子を育てるというだけでも大変そうだが、さらに、ダウン症の啓発イベントを主催し、交換会まで活動を広げる武田みどりさん。若い子育て世代の親にとって、まさに太陽のような存在だ

# 子育て中のお母さんが ふらりと気軽に 行ける場を

子ども用品を無料で交換できる「ベビー&キッズ用品交換会」。SDGsな取組に感じますが、実際にはほかに魅力がありました。主催するのは、ご自身もダウン症のあるお子さんを持ち、世界的ダウン症啓蒙啓発チャリティウオーキングイベント「バディウオーク®」を京都で開催するAt-Kyotoの武田みどりさん。その想いを伺いました。

——現在の活動について伺えますか？

子ども服や用品の交換会をしています。まだ使えるのにもう使わなくなったものを、お母さんや家族が持ち込んだり、欲しいものをいくつかでも自由に持ち帰ったりできる場です。買取りや販売はしません。さまざまな方法の交換会がありますが、私が始めた3年前はコロナが蔓延していて、暮らしのなかに多くの制約がありました。そこで、すべての制約を外して、なにをいくつ持ってきてでも持ち帰ってもいいことにしました。一円でもお金の価値が絡むと品定めし始めてしまう。いくら払ったからやめておこう、この金額なら要らないといったことが生まれる。でも、お金を介さないことで、少し汚れていて迷いそうな商品も「いいわ。使えるし」と持ち帰ってもらえる。ごみになっていたかもしれないものが、だれかに使ってもらえるという価値が生まれ、お金を介さないことでより価値が生まれる。持ってきたものが活かされる喜び。喜んで帰って帰る人を見る喜び。無料で手に入ったわけではない豊かさが生まれる場です。

——どこで開催していますか？

上京区2カ所。左京区2カ所。東山区1カ所。伏見区1カ所。上京区は相談支援事業所の「しばふあーれ」と民家で、それぞれ月1〜2回。左京西部いきいき市民活動サロンで月1回、左京東部いきいき市民活動サロンで不定期。さらに今年度は東山いきいき市民活動センターで開催しました。伏見区では「深草こども食堂」と一緒に月1回。上京区ではほかに、京都市のつどいの広場「そらひろば」が開館時間に交換スペースという形で利用できる場所を作ってくださいしています。そこ以外は、すべて私が出向いています。

——在庫の管理が大変そうですね？

実は10年ほど前にも交換会をしていたんです。当時、扱っていたのは衣類のみで在庫はすべて自宅に保管していました。でも、今回、最初に開催した「しばふあーれ」に「置いていいよ」と言っていたいただきました。その一言があったから今のよう形で開催できています。当初はコロナ禍で、だれかに譲ることもできず各家庭にどんどん不用品が溜まっていました。だから、手に入れて喜ぶというより、家に置いておけないから

## プロフィール

1975年生。上京区在住。4人姉弟の母。ダウン症のある次男出産を機にダウン症啓発とピアサポート\*がライフワークに。子育てがひと段落したタイミングでヘルパー資格を取得。障害・子育て分野で活動。地域の主任児童委員となり、コロナ禍でより深刻化した妊産婦子育て世帯の孤立へのアプローチとしてベビー&キッズ用品交換会をスタート。左京区と上京区を行き来しながら、より地域に根差したあり方を模索し活動を続けている。

\*ピアとは仲間・対等という意味で専門家による援助とは違い同じ立場の人同士が互いに助け合うこと

※障がいがある人の生活の困りごとに対して幅広く対応している窓口

届けたいという方も多く、想像以上にたくさん集まりました。私個人が引き受けていたら継続してやっていこうとは思えなかったと思いますし、そのおかげで制限をかけずに済んだのだと思います。また、地域の民生児童委員の会長さんがご好意で納戸を貸してくださるなど、地域の方の温かさによって安心して在庫を扱えています。上京区の「そらひろば」では常設されているので片づける必要もない。「出張交換会」には私が持っています。出張で開催していきなかなで、うちでもやろうという人が出てきて、そこに置かせてもらえることになり、その流れで継続的に開催できる。私一人ではなく、賛同してくださる人たちの力があって広がっています。

——お子さんも多いですがワークライフバ



左京東部サロンでの交換会は「影絵とアートと交換会」。廃材工作や影絵劇も楽しめる



持ってきたものはとりあえずビニールプールに入れる。この段階からみんな覗きに来る

ランスはどうしておられますか？

今は交換会の比率が高いです。でも、自分の感覚としては、仕事と交換会が1対9。家族のことは、それとは別の10があると思います。子どもは4人。一番下が小学5年生、上が高校3年生になり、個々の人生が少しずつ豊かになり、同時にそれぞれ幼少期とは違う新たな課題が見えてきた。仕事を中心に据えると、子どもたちになにかあったときソフトチェンジできない環境になってしまふ。動けないのなら、その時間を有意義に使えるようにと、交換会をしているんだと思います。仕事ほど集中せずに、子どもたちにもエネルギーが注げるので。

——その原動力はどこにありますか？

この活動そのものが原動力です。なにが目標があって、そのために活動している訳ではありません。こんなお母さんとお会いした、こんな新しい発見があったという感動が毎回必ずある。それに触れ力をもらっています。交換会に来たお母さんたちは、私を身を削っていると感じてくれますが、力を貰っているのはこちらだと伝えていきます。大きいイベントの開催とはまた違う喜びがあるんです。友だちでも知り合いでも、そこまで深く関わらないだろうという交流ができた、家族にも話せないこと、ほかの場所では話せないことが話せたり、密度の濃い関係性が築けている気がします。

交換会に来た人は、自分が持ってきたものを目の前で喜んで持って帰ってくれる姿にまず驚いて、そこに喜んでおられます。不用品って近しい人に譲ったとしても、押しつけになってしまわないかというもどかしさがある。でも、交換会では気に入った人が持つて帰るからそういう重苦しさがない。「ありがとう！」と喜んで持つて帰る親

子の姿に、すごくエネルギーをもらう。

子育てしている多世代のお母さんに自然に出会えることも大きいようです。たとえば、妊婦さん同士は産婦人科では出会えるけれど、ちょっと先輩のお母さんや本物の赤ちゃんには出会えない。赤ちゃんやお母さんに会って、子育てのリアルな声を聞けるのは妊婦さんにとって貴重ですよ。

交換会を始めたきっかけも、不用品を渡したかったからではないんです。コロナ禍で外出できない、人と会えない状況で出産して子育てをスタートしたお母さんたち、子育て世代が無料で気軽に行ける施設が休館になり、行き場を失った孤独なお母さんたちと出会いたいと思ったんです。私は地域の民生児童委員協議会に所属していることもあり、そんな孤立している子育て世代と出会うために交換会を始めました。物を置く、物を取りにくるだけだから、長時間いっしょにすることもなく密にもならない。でも、物を介して、だれかと出会える。自己紹介やおしゃべりが得意じゃなくても、時間を決めて予約をしなくても、思い立つたらふらっと気軽に行ける場所。そういう場があまりにもなかった。安否確認じゃないけれど、「あ、同じように子育てしてる人がいるんだ」と思えるようなゆるいつながりの場だからいいんです。

——今後どんな展開を考えていますか？

公式LINEアカウントを立ち上げました。外出できないお母さんに個別の対応をしたかったのと、子育てでしんどいときや体調不良のときヘルプを投げたら「助けに行きよ」「その話聞くよ」と応えるようなホットラインにできるのではないかと思って。最初は、個々が大事にされるやりとりを深めていくことを重視していました。在り方

は変わりませんが、今後は交換会の場が、もっと身近になればと。郵便局ぐらい地域に点在していただければいいなと思っています。

また、今後やってみようと思っているのは、こども食堂ならぬ「お母ちゃん食堂」。出産や子育ては大きな価値観の変化が必要で、そこから新しい視野が広がっていく大きなターニングポイントになるので、交換会は新しいまちづくりの軸になりうる場だと考えています。次に、もう一歩踏み込んで「食を共にする場」をつくりたいなど。実は、私は調理師で飲食の現場にいたんです。食卓が人を繋ぐ力になることや、あたたかい食事に人を満たす力があることを大切に思っ生きていたので、しんどいママたちに我が家で一緒にごはんを食べようと誘っています。手の込んだものではなく、あり合わせの日常のおばんざいを一緒につく。子育て中のママはゆっくりごはんも食べられない、お風呂も入れない、食事を作るのがままならない。子どもと2人きりの食事が苦痛でたまらないママもいる。そんな声も多数あるので、お母ちゃん食堂を作って、月一回でもいいから、ママたちにはひと息ついてゆっくりご飯を食べてもらいたいんです。具沢山味噌汁と炊き立てごはんだけでも、みんなで食べたらっご馳走です。料理は、不登校4年目に入ろうとしている我が家の末っ子の力をかりることもできませんし、補助金の助けもあるので、無理なく今すぐにでも始められると思います。同じ釜の飯を喰らって、たまたま居合わせた人たちの距離がちょっと近くなればうれしいです。衣食住の衣は交換会、食はお母ちゃん食堂。ささやかだけど、少しでも個々になんらかの形で満たされるひとときをつくれなにかと考えています。



活動日数：月約7回  
 (別途「そらひろば」月約6回)  
 活動場所：上京区、左京区、東山区、  
 伏見区など  
 活動内容：こども服・用品の無料交換会  
 参加費：無料(事前予約不要)  
 代表：武田みどり

着なくなった衣類、使わなくなったおもちゃ、ベビーベッド、チャイルドシートなど。持ち込むものがなければ手ぶらで遊びに来てください。子育てに関わるすべての方のための場所です。

公式サイト



公式LINE



## 『しゃかっつの人』発行に寄せて

### 明るい話

左京東部いきいき市民活動センター センター長 杉山 準

人間の脳はポジティブなことよりもネガティブなことに反応しやすくできているそうです。センセーショナルなニュースや悪いニュースに反応しがちなのは、脳のなかのフィルターが悪いニュースを多く通してしまうからとのこと。

「悪いニュースばかりで嫌になる」と思ったことや、だれかのそんな愚痴を耳にしたことはありませんか。でもそれは、悪いニュースに反応しがちな自分たちの脳のせいだとしたら、ちょっと皮肉です。

だれにでも起こりうる思い込みを乗り越えて、データを基に世界を正しく見る必要性を説いたベストセラー、ハンス・ロスリングほか著『FACTFULNESS (ファクトフルネス)』では「世界はどんどん悪くなっている」と感じている人の割合が、調査した30カ国すべてで半数を超えているというデータを示しています。また、「本当の意味で『明るい話』とは、数え切れないほどの『小さな進歩』が世界中で起きていることだ」と述べたうえで、その一つ一つの変化はゆっくりで細切れだから、なかなかニュースには取り上げられないと指摘しています。

さて、私たちは社会を良くしている身近で小さな活動をここで取り上げようとしています。「明るい話」です。多く

の人の脳のフィルターで弾かれがちな話です。でも、あえて伝えたいのです。なぜなら、こうした活動の大切な側面は、その活動そのものの効果にとどまらず、こうした活動に触れた人の意識や考え方にいい変化を与えることだと思っているからです。こうした情報はセンセーショナルでもありませんから当然広がりづらいです。でも、これを見てくださった方にわずかでも届く可能性に希望を持ちたいのです。

世界では戦争が起こり、わが国では相変わらず政治スキャンダルや天変地異など悲しい事柄がニュースの見出しを飾ります。「世界は悪くなっている」「ますます悪くなるのではないか」と感じて不思議ではありません。身近なところに目を移しても「良くなっている」手触りはなかなか感じられないかもしれません。でも、前述の著書では、さまざまな具体的なデータを挙げて「実は世界は良くなっている」と結論づけています。良くなっているのです！

そして、きっとその影には今も世界のさまざまな場所で、たとえばほんの小さなコミュニティで、なにかを少しでも良くしようと奮闘する活動が地道におこなわれているはずです。

そうした行為を知ることで「まんざらでもない」と少し思える気がするのです。



杉山 準 (すぎやま じゅん)

演劇プロデューサー／特定非営利活動法人劇研理事長／京都市左京東部いきいき市民活動センターセンター長  
 2000年より2008年まで京都の小劇場『アトリエ劇研(げっけん)』プロデューサー(劇場は2017年閉館)を勤める。  
 2003年に当劇場を管理運営するNPO法人『特定非営利活動法人劇研(げきけん)』を立ち上げ理事・事務局長に就任し現在に至る。当法人は2011年から京都市の施設左京西部いきいき市民活動センター、2015年からは左京東部いきいき市民活動センターの指定管理者として運営している。演劇プロデューサーとして舞台芸術の振興ならびに、文化・芸術を通じて社会に貢献する事業を企画制作するとともに、左京東部いきいき市民活動センターのセンター長として多様な市民活動の支援をおこなっている。

[取材協力]

At-Kyoto 武田 みどり氏

[発行]

京都市左京東部いきいき市民活動センター / 指定管理者 特定非営利活動法人劇研 令和5年度市民の社会関与を促進する事業 取り組み1 市民活動団体活動勉強会  
 〒606-8432 京都市左京区鹿ヶ谷高岸町3-2 TEL 075-761-1385 FAX 075-752-3350

